偶然は、創られた奇跡

工房径

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
偶然は、創られた奇跡

【Ｎコード】
Ｎ５８３３Ｐ

【作者名】
工房径

【あらすじ】
初めから気になっていた、不器用だけど懸命な彼女のこと。会社の同期だった周平と真紀の私鉄沿線の恋に、なかなか快速列車はこないようで・・・。「ずっと、冬のままで」の周平サイドの物語。

ふたりの朝

子犬みたいだ、と思った。

自分より大きな物が来るときゃんきゃん吠える子犬。ちっぽけなくせに精一杯強がって、体全体で甲高い声を上げる。端から見れば弱っちいのは一目瞭然なんだが、本人は気付いちゃいないのがおもしろくて。うちで飼っている柴犬のトム（これは母親の好きなトム・ハンクスから取った名前だ）の子犬時代を彷彿とさせる。

同期の藤沢真紀のことだ。

入社した当時、同じ部署に同期は男女２人ずつの４人。事業拡張で無理難題を強いられ、新人の俺たちも訳が分からぬまま悪戦苦闘の毎日だった。幸い上司は理解があったが、業務の多さはどうにもならず、毎日手当の付かない深夜残業の日々。俺は実家から通っていたが、徒歩も合わせて片道４５分の通勤時間は結構痛かった。しかも、没頭していると他に頭が行かなくなる俺はすぐ終電を逃す。週の半分は仮眠室のお世話になった。

真紀は会社のすぐ近くに部屋を借りていた。もう一人の同期の青木美砂などは、遅くなった時の定宿にしていたくらいだ。通勤が短い分、真紀は誰より早く出社して、コーヒーを淹れたり、仕事の準備をしたりしていた。あまり要領が良くない彼女。しかしそれも実直で正義感の強い彼女の本質ゆえだった。手抜きができず、曲がったことが嫌いで、納得いくまで先に進めない。時には上司にまで語気を荒げて突っかかることもあり、ひやひやした。しかし直属の課長は真紀を結構気に入っておりその性格も折り込み済みだったので、うまく真紀をクールダウンさせ譲歩へ持ち込ませた。俺が上司だったらあんなにうまく真紀を説得できるだろうか。尊敬と同時に嫉妬を覚えて、早く一人前になりたいと思った。俺が真紀にできることは、泊まり明けの時コーヒーを淹れておくくらいだ。忙しい分俺たち同期は絆が強かった。誰一人つぶれる訳にはいかないと互いに思

いやっていた。
　そんな泊まり明けの朝、食べる飯もなく、自分で淹れたコーヒーにせめてミルクと砂糖をたっぷり入れて空きっ腹に流し込んでいると、真紀が赤い紙袋を差し出した。
「何？」
　袋を開けると中には大きなおにぎりが2個入っていた。二個とも五目ご飯で、市販のものより具の刻みが荒く、いかにも手作りって感じだ。まだほのかに温かい。
「いっぱい炊かないと美味しくないから、作りすぎちゃって。」
　真紀は、悪いけどもらってほしいというようなスタンスで言った。彼女らしい。
「ありがとな」
　俺はすぐにかぶりついた。美味い。甘辛い味の中にごぼうやらこんにゃくやらいろんな食感が混じって、予想に反して具の大きさがうまくアクセントになっている。手が込んでいるが、炊きたてみたいだ。前日のうちに仕込んだのかもしれない。俺は一人っ子で、料理に関しては母親がよくぼやくので、こういう舞台裏を察知できる男になってしまっていた。しかしそれは本人には言わなかった。
「うまかった。ごちそうさん」
　俺は最後の一口を噛み締めながら言った。
「もう食べ終わったの？」
　真紀は呆れたように言って、バッグから自分の弁当袋を取り出した。
「もっと食べる？」
「いや、いいよ」
　彼女が忙しい中弁当を作るのは、すぐ食べて仕事にかかれるようにしているためだと知っている。
「ありがとな」
　俺はもう一度繰り返した。
「そんな、私こそいつもコーヒー淹れてもらってるし」

真紀は照れくさそうにもじもじした。そうか、こいつは俺が真紀の負担を軽くしようとコーヒーを淹れているのを分かってたんだ。おにぎりも初めから俺の分まで見込んでいたに違いない。すぐに食べられて、野菜もとれて、弁当みたいに仰々しくなくて。いろいろ思い悩んでメニューを決めたのかもしれない。分かりにくいが可愛いやつ。

その時から、俺は胃袋ごとまんまと真紀に捕われてしまったのだった。

照らされる岐路

それ以来、俺は真紀への気持ちを明らかにしないまま、そっと彼女を見守ってきた。気持ちをぶつけてしまえば、彼女がいらぬ悩みでつぶれるかもしれないと思ったからだ。そのうち何とか業務にも慣れ、部署の事業も軌道に乗った2年目、俺と青木美砂に辞令が出た。そのうち配置転換があることは分かっていたが、いざ現実になると俺は思ったよりへこんでいた。俺が行くことになった企画部は同じ社屋でも8階で、今いる3階の部屋とはほとんど行き来がない。しかも美砂まで広報に転属で、残る同期はいささか頼りない佐倉良介だけ。真紀の動揺は目に見えている。そんな気持ちとは裏腹にその時は刻一刻と近付いてきた。

俺たちの送別会は3月末のまだ肌寒い金曜の夜に開かれた。居酒屋の隅で、案の定真紀は泣きじゃくって美砂の傍を離れなかった。

「あんたねー、あたし皆に挨拶しなきゃなんないんだから」

ビール瓶を持ってお酌に回る美砂のジャケットの裾を持ったまま、ずるずると一緒に移動している。おいおい。

「周平君、なんとかしてよ」

美砂が俺に真紀を任せようとしたが、真紀は泣きながら首を振り、美砂から離れようとしなかった。俺には何の感慨もないのか？俺は苦々しい想いで酌を受けて飲めない酒を煽った。そのうち酔いつぶれた真紀を美砂が早々に送って行った。帰り際美砂は、

「周平君、帰んないでよ。すぐ戻るから」

と言い捨てて行った。居酒屋は会社のすぐ近くで真紀の部屋からもさほど離れていない。程なく美砂は帰ってきた。

「おまちどう。とりあえずベッドに寝せてきた。大分飲まされた？」

「ああ、ほっとけ」

俺は酒に弱く飲むと地がでるので滅多に深酒はしない。しかし今

日は真紀のそっけない態度に腹を立てて飲み過ぎてしまった。ついつい口調も粗野になるが、美砂はむしろ嬉しそうだ。
「ふふん、いい傾向ね。ウラ周平の登場ですよ」
「なんだ、それ」
「夏の納涼会のこと忘れちゃった？真紀にしがみついて『俺のことはどうでもいいのか』って騒いだじゃない」
そんなことあったか？内心青くなる俺に美砂はからからと笑った。
「あの時は酔ってたから真紀も覚えてないと思うよ。いいのよ、あんたも少しは本音だしたらいいんだわ。」
その後、美砂は急に真面目な顔をしたかと思うと、
「真紀は私たちがいなくたって大丈夫よ。課長だってそう思ったから私たち二人を出したんじゃん。」
と囁いた。美砂の中で俺は真紀に過保護だと思われているらしい。
「別にそこまで心配してない」
「・・・分かってるって。あんたが真紀を好きだってことは」
美砂は人参のスティックでくるくると俺を指しながら言った。ぎょっとする。
「何言って」
「ばればれなんだよ」
後ろから男の囁き声が聞こえて、俺はぎょっとして振り向いた。もう一人の同期佐倉良介が人の良さそうな顔を綻ばせて、肩をぽんぽん叩いてくる。
「真紀ちゃんは俺が見張ってるから。大丈夫、課長は来年結婚決まってるし」
「はあっ？」
こいつら！俺の真紀への気持ちも、課長への嫉妬も全部分かってたっていうのか？俺はぐんと酔いが回った気がした。
「課長には妙につっぱるなあと思ってたよ・・・なあんて、課長を敵視してんのは俺も最近美砂から聞いたんだけど。」
良介はにこにこして美砂の肩を抱いた。

「おい、まさか」
「はい、美砂の犬と呼ばれて早1年、ついに佐倉咲きました」
最後は自分の名前にかけた駄洒落でしめた。
「何だあっ？」
良介が美砂に好意を持っているのは明らかで、美砂の後をくっついているのを茶化して犬と称したのは他ならない俺ではあったが。これで案外守りの堅い美砂はなかなか陥落しないだろうと思っていた。
「てめえら、それを報告したかっただけだろう？」
ふたりを睨むと美砂は否定するが、
「そうとも言う」
良介は悪びれずに破顔した。しかしすぐに真剣な表情になる。
「お前はいいのかよ、このままで」
「そんなこと言ったって」
今更どうにもならない。俺はため息をついた。
「まあ、相手があの真紀だからね。道のりは険しいよ」
美砂は同情する、と言って、男前に気の抜けたビールを煽った。
「ま、同期会とか機会は設けてあげるわよ、ね？」
見上げる美砂に良介は顔を綻ばせて何度も頷く。こんな嬉しそうな奴を見るのは初めてだった。何にせよ人の幸せはいいもんだ。よかったな、良介。
高い窓の外を見ると、ほんの数輪咲いた桜を月が冴え冴えと照らしていた。
今頃真紀は一人夢の中だろう。
どこか夢の片隅に俺のことがあるといい。
俺は朦朧とした頭でそんなことを願った。

他の誰かでなく

良介からの情報によれば、真紀は後輩に慕われ新しい同僚にも恵まれて、うまくやっているようだった。予想通り、俺は転属してから忙しさも手伝ってほとんど真紀に会えなかった。たまに見かけても挨拶程度で話す暇すらない。でも目が合うと、久しぶりのせいか嬉しそうに微笑んでくれる。それだけで馬鹿みたいに救われて、その日一日がうまく回っていく気がした。離れた位置に立って初めて、彼女を守り支えていたつもりが、自分がどんなに支えられていたかに気付き愕然とする。あれ以来、美砂と良介は同期会を開いて俺を幹事にしたり、いろいろ世話を焼いてくれたが、真紀との距離は一向に縮まなかった。

家で犬のトムをからかって遊んでいても、ぼんやり真紀のことを思い出す。第二金曜日の昨日は同期会だったのに、真紀は参加できなかった。なかなか待ち合わせに現れない真紀を会社のロビーで呼び出すと、遠くから彼女の携帯の着メロが聞こえた。曲名は知らないが何だかセンチメンタルな曲調で、何となく覚えていた。

「ごめーん！仕事が立て込んじゃってしばらく帰れそうにないの。今日は皆で楽しんできて？」

ちょうど1階で資料を運んでいる最中に電話を掛けたしまったらしく、紙筒や書類を小脇に抱えて駆けてきた。両手を目の前で重ねて拝むように俺を見上げる。急いできたためか息が上がって頬が上気していた。ほぼ1ヶ月ぶりの再会。つれないことを言われているのに、視線が合っただけでどきどきしてめまいがしそうだった。だから本当は未練たらたらのくせに、

「そっか、無理すんなよ」

と無難な言葉を掛けることしかできなかった。

「何のための同期会か！『遅くなっても待ってる』とか気の利いた

こと言えないのかね」
　良介たちに呆れられても仕方ない。軽い二日酔いで頭も重く何をする当てもない土曜日、犬にボールを投げてやっているとお袋の弾くへたくそなピアノが聞こえる。あ、また同じところで間違えた。いらいらして文句を言いに行こうかと立ち上がったその時、やっと先に進んだ。あれ？覚えのあるフレーズ。何だっけ？
「その曲何？」
　俺が部屋に突然入ってきたので、お袋はびっくりして手を止めた。
「脅かさないでよ」
　それでも、この曲に興味を示したのが嬉しいらしく、嬉々として楽譜を見せてきた。
「Ａｎｙｏｎｅ　ａｔ　ａｌｌよ、ほら私の好きなトムさまの映画のエンドロールで流れてた」
　そう言って楽譜を見せてくる。映画は以前お袋に無理矢理見せられたことのあるロマンティックコメディで、歌っているのはキャロル・キングだった。
「ああ！」
　真紀の昨日の着メロ！そういえば以前彼女もキャロル・キングが好きと言っていた。
「良い歌よねえ。覚えてたなんて、無理矢理映画見せた甲斐があったわ」
「違うって！同期の真紀がこれを着メロにしてたから」
　その言葉をきいた母親はええっ！と言って乗り出した。
「それって周ちゃん専用？」
「何だよ」
「だって、真紀ちゃんて周ちゃんが好きな子でしょ？」
「はあっ！？」
　何でお袋にまでバレてんだよ！
「入社した初めの頃、よく真紀真紀言ってたもんね？どうなのよう、ねえっ！」

「知らねえよ！」
なんでそんなに興奮してんだよ。
「だってＡｎｙｏｎｅ　ａｔ　ａｌって他の誰かでなくてあなたで良かった、ってことじゃなーい！その子も絶対周ちゃんが好きなのよ！」
他の誰か、でなく。真紀は歌詞の内容を知っているのだろうか。
企画部に行ってから、何故か俺は女性から声をかけられることが多くなった。はっきりつきあって、と言われることもあったが、まったく心は動かない。
他の誰か、ではだめだ、だめなのに。
犬のトムが焦れて呼ぶ声に気付いて、俺はにじり寄ってくるお袋に楽譜を返し、庭に戻った。

交わる軌跡

美砂から真紀が引っ越すと知らされたのは夏だった。古い物件だったので改築のため春頃突然大家から立ち退き要請が出て、急遽部屋を探したのだという。

「今度どこに住むって？」

「さあ？そのうち葉書とか来るんじゃないの？」

いつまでも動かない俺に、最近美砂たちは冷たい。夏も何かにかこつけて会いたいと思っていたのに、引っ越しで忙しいらしいよ、でおしまい。相変わらずすれ違い程度の接触しかなかった。

9月になり残暑は続いていたが、電車の吊り広告も秋の行楽の特集が踊る。路線のコーヒーチェーン店バーナードカフェも秋冬限定のメニューを知らせていた。今年も来た、スパイシーバニララテ。あれ好きなんだよな。会社帰り、俺は自分の最寄り駅の一つ手前の浅葱駅で降りて、バーナードカフェに寄ることにした。駅ビルの本屋で新刊の時代小説を買って、ラテのマグカップを手にカフェの一番奥に陣取る。ラテは熱いコーヒーに冷たいバニラクリームを乗せ、エスニックな香辛料を振りかけた甘い飲み物で、疲れた頭に染み渡る。暑い時にスパイシーな熱い飲み物と冷厳な時代小説。ささやかなる至福の時。満足して香り高いカップから目を上げた時、幻かと思った。

真紀がいる。カフェのレジカウンターの端っこに一人で立って注文を待っていた。会社にいる時の気が張った様子と違って、いかにも仕事が終わって後は帰るだけといった力の抜けた風情だ。ここにいるということは、もしかしたらこの路線に引っ越したのだろうか？声を掛けようと思わず立ち上がったが、そのタイミングで彼女の注文が届いた。バーナードカフェオリジナルの犬のマークのついた赤い保温マグだ。彼女は見とれる程の笑顔を店員に返しながらマグを受け取ると、店を後にした。テイクアウトか！慌てて自分のラテ

を飲み干し荷物を持って急いで後を追うが、端に座っていたのが仇となり真紀の後ろ姿はあっという間に見えなくなった。
だが消えた方角は分かった。駅と、逆。きっと彼女はこの街に住んでいる！俺は高揚する気持ちを抑え、拳を握りしめた。ここに住んでいるなら、また、会える。ラテの香りが甘く肩を押す。俺はまだ神様に見放されてはいないみたいだ。

バーナードカフェで見かけてから程なくして、買ってきた朝食をとろうと入った会社の休憩室で真紀に会った。ほとんど唯一の接点と言っていいこの場所に、暇が出来れば真紀を探しに来ていたが、なかなかその暇が作れない。こうして面と向かって会うのは1ヶ月ぶり位だろうか。向こうは二人の同僚と一緒で、会議室の予約表を見て何かの予定を話し合っていたようだった。ここは休憩室だ、少しだけ。構わず話しかけた。
「久しぶり」
真紀も嬉しそうに笑ってくれる。上気する頬。つやつやと真っ直ぐで肩のところでくるんと丸まっている内巻きの髪。話す時よく頭が動く真紀は、髪のカールが弾むように何度も揺れる。
「企画部大変そうだね」
「まあ1月のイベントまではね」
毎年1月に自社製品を一堂に集めて紹介するイベントがある。そのイベントで転属後初めて俺の持ち込んだ企画が通った。何としても成功させねばならない。しかもその日は何の偶然か、真紀の誕生日だった。
「忙しいけど、あの頃のことを思えばどうってことない」
俺にしてはちょっとセンチメンタルな言い草だったろうか。しかし真紀は深く頷いてくれる。手にはまたあのマグを持っていた。しかもあのスパイシーバニララテの独特な香り。忙しい朝わざわざ寄ってきた、ということは、やっぱり浅葱駅を使っているに違いない

と再確認する。チャンスが俺の手の中に落ちてきた。でもまだだ。イベントが終わるまでは、仕事に集中しなければ。もっと真紀と話したかったが、飯が早い俺はすぐ食べ終わってしまった。時間も押しているし同僚もいることなので切り上げることにする。

「じゃ・・・またな」

俺は端から見てもすごく名残惜しそうだったんだろう、真紀の同僚が真紀を小突いて冷やかしていたが、真紀は何のことか気付いていないみたいだった。

待ってろよ！

一度スタートフラッグが振られたら、俺は猛進あるのみ、だからな。

つづれおり

会社の行き帰り、いつも体のどこかを研ぎ澄ませて真紀を探していた。本を読みながら、電車の到着時刻を確認しながら、五感のどこかが彼女を感知しようと俺も知らぬ間にｏｎになる。会社の最寄り駅である赤松で、電車の中で、浅葱駅を乗り降りする乗客の中に、彼女の姿を追った。

休憩室で真紀にあったその日赤松駅で電車を待っていると、同じホームの何両目か先に、探していた内巻きのおかっぱ頭が現れた。いた！白いイヤホンのコードが見えていて音楽を聴いているらしい。電車が到着して俺は慌てて真紀の列に近づき、ぎりぎり隣のドアから乗り込むことが出来た。車内は何とか移動できるくらいの混み具合だ。そばまで近付き、脅かさないよう持っていた文庫本の背で軽く肩を叩いた。

「また会ったね」

真紀はイヤホンの片耳を外して俺を見上げた。

「周平君、この路線だった？」

「うん、笠倉町」

「お隣だね、私は浅葱町」

やっぱり。分かってはいたが彼女の口から聞くとやはり嬉しい。その後俺は実家通いだということを話すと、自然と入社１年目の頃の話になった。俺はすかさず、

「よく真紀の弁当ごちそうになったもんな」

と感謝を込めていい、

「真紀の五目おにぎり、うまかったなあ。あのこんにゃく入ってるやつ」

と付け加えるのも忘れなかった。本当にあの味は忘れない。案の定真紀は照れながら嬉しそうにしていた。

こんな真紀が見たい。ふたりで一つ一つ些細な毎日を煉瓦のよう

に積み立てたい。しっかり間を塗り込めて決して崩れないように。
俺は慎重にタイミングを計って真紀のバッグから覗いているバーナード・カフェのマグを指していった。
「昼休憩室で会った時、秋冬限定スパイシーバニララテの濃厚な匂いが」
真紀はさすがに驚きを隠せない。
「俺、あれ毎年すっごく楽しみにしててさ、帰りに浅葱で途中下車するくらい好き。」
これは恥ずかしいが本当のことだ。ついでに付け加えてやった。
「今日も午後からずっと飲みたくて。真紀のせいだ」
この位言ってやらないと強引には誘えない。飲んだばっかりなんですけど、とこぼす割に嫌そうでもない真紀をいいことに、奢るから、と言ってバーナードカフェに連行した。マグを握る白い指先に淡いマニキュア。あの頃はなかった色に胸が鳴る。その時真紀の携帯がなった。
「美砂だ、ちょっとごめん」
着メロが違う！同じキャロル・キングだけどＴａｐｅｓｔｒｙだ。俺はまんまとお袋の言葉を思い出し興奮してカップを握りしめた。
「ええ？良介君が？うん。あ、今ね、カフェなの。周平君とお茶してんの。偶然電車が一緒になって。え？」
真紀が俺に携帯を差し出す。
「代われって」
嫌な予感がする。俺はおそるおそる携帯を耳に当てた。
「何だ？」
「お邪魔だったかしら？」
美砂はわざとらしく澄ました声を出す。
「うまくやってるじゃない。でも偶然だなんて思わないでよ？」
「は？」
何のことだ？
「真紀の部屋探し、最後の２件にしぼられた時、浅葱の物件を押し

たのは私でーす」
「！」
さすがの俺も大きな声を上げそうになった。
「感謝は是非とも形で表して。じゃあね」
大きく息を吐いて携帯を返した。真紀は小首をかしげている。自分のことだなんてこれっぽっちも思ってないだろう。やられた。本当に美砂って奴は侮れない。
「そういえば、さっきの着メロ、Ｔａｐｅｓｔｒｙだったな」
俺は知りたかった事実に話を戻した。
「うん。同期の着メロはキャロル・キングで統一したの。サイトにちょうど３曲あって。ちなみに良介君はＹｏｕ' ｖｅ　Ｇｏｔ　Ａ　Ｆｒｉｅｎｄで、周平君のは」
「Ａｎｙｏｎｅ　Ａｔ　Ａｌｌ」
先に言うと、真紀は感心したように頷いた。
「・・・そう、よく知ってるね」
「今おふくろがピアノで練習中なんだよ。しつこいくらい弾いてて嫌でも耳に残ってる」
本当は、耳に残っていたのは真紀の着メロだったけど。「歌詞の意味、知ってる？」喉元までその言葉が湧き上がるが黙っていた。追い詰めて気まずくなりたくない。今はまだせっかく手に入れたこの幸運な時間を逃したくなかった。
「すてきなお母さん！そっか、トム・ハンクスのファンで犬にトムって名前つけたって言ってたもんね。トムくん元気？」
映画のことは知っているみたいだけど、照れもしない。彼女の隠し事の出来ない性格を考えると特に選曲に意味はなかった様だ。俺は内心がっくりしたが、久しぶりに見る屈託のない笑顔に少し邪心が遠退いた。
ま、いいか。ここまで漕ぎ着けただけでも。考えてみたら二人きりっていうのも初めての様な気がする。もう３年になるのに、俺も大概気が長いなあ。

それでも秋冬の間はこの駅で降りる口実ができたんだ。真紀をこんなに近くで見つめていられる幸福を、スパイスの香り越しにそっと噛み締めた。

その時まで

しかし、秋冬は忙しいシーズンでもあった。1月の展示会まではプライベートどころではない。ただ忙しいのは真紀も同じらしく、一緒に帰れることも少なくなかった。駅で俺を見つけた瞬間、ぱっと表情を明るく輝かせる真紀を見ると、会社での理不尽なもめ事も一瞬にして消え去った。

ふたりの時は出来るだけ紳士的でいたかった。彼女の話を聞いてやり、俺と居る時は少しでも安らげれば、と思っているのに、疲れていると徐々に甘えが出る。ぽろりとネガティブなことをこぼしたり、離れ難くて長々と食事に付き合わせたり。こないだは浮かれてワインまで頼んでしまった。酒に弱い俺は飲むとつい本音が出て、余計なことを話しかねないのに。遅くなった口実に真紀を部屋まで送って行けたのは良かったが、もちろん真紀は部屋に上げてくれるなんてことはなくて、ぴったり閉ざされたドアを恨めしく眺めて帰った。

「守備はどう？」

美砂は俺と会う度真紀とのことを聞いてくる。

「ぼちぼち？」

他人事のように言う俺に美砂は呆れている。

「何、それ。真紀にも鎌かけたけど、何かムキになって否定されちゃったし」

「は？」

「あんたたち、うちの後輩に目撃されて。つき合ってんじゃないかって言われてんのよ。それを真紀に話したんだけど、ちょっとキレちゃって」

「変なこと言うなよ」

「だって見てられなくて」

「頼むよ」
俺は美砂にすがるように言った。
「真紀の性格分かってるだろ。焦ってぶち壊したくない」
こないだ強引な先輩に告られた真紀は、パニくったあげくそいつの横っ面をひっぱたいて逃げてしまったそうだ。美砂は笑い話として話してくれたのだが、俺は二重の意味で焦った。タイミングを誤ると同じ結果が待っているということと、真紀を狙う奴がいるという事。
「壊さなきゃ進めないじゃん」
美砂は引かない。まさに良介は壊して美砂を手に入れたのだろう。経験者の言葉は重い。
「季節柄イベントだって盛りだくさんじゃない？クリスマスに、１月は真紀の誕生日」
「その日はちょうど会社の展示会！イブだって何時に帰れるか、イベントどころじゃねえ。俺だって初めて通った企画がうまくいくかの瀬戸際なんだ」
「そうだけど」
珍しく少し当たるようなことを言ってしまった。美砂だって重々承知の上で言っているのだ。分かってる。
「・・・悪い。ありがとな、感謝してる。でも俺は俺のペースでしか進めないから」
美砂は頷いてぽんぽんと俺の腕を励ますように叩いた。
まずは展示会。動くのはそれが終わってからだ。業務を疎かにするのは俺も嫌だし、何よりきっと真紀も許さない。
もう少し待っていてほしい、機が熟すまで。
美砂や、真紀、そして俺自身も。
こんこんと湧き上がるこの恋情は、油断すればあっという間にあふれそうで。いつまで押しとどめられるか、俺だって自信がないんだ。

ささやかな祝福を

奇しくも真紀の誕生日に行われる会社の展示会。例年1月の土曜日に取引先を呼び、製品の展示だけでなく会社の好感度アップのため様々な催しを企画する。俺の提案は近隣の一般市民も呼んで、地域に密着・還元している会社というのをアピールしようというものだった。取引先にも「家族向けなので今年は子供さんも是非」と可愛いカードを付けて招待し、近くのスーパーや幼稚園にもポスターを貼らせてもらう。ネックは資金と人員だったが、何とか目処もつきゴーサインが出た。

12月も慌ただしかった。クリスマスイブも何を祝うでもなくただ黙々と働く。むろん着飾って慌てて帰って行く女子社員や、遅くなるからと泣きの電話を入れている既婚者の上司の姿はあった。しかし俺の仕事に果ては見えない。デスクの上でカップ麺をすすって夕飯を済まし、深夜に仕事が何とか片付いた後はまっすぐ帰宅の途についた。

赤松駅にも市民の手作りツリーが飾られて、夜が更けても街全体が浮かれているように見える。駅のコンコース沿いに並ぶ色とりどりの点滅を、ぼんやり眺めながら歩いた。

と、そのツリーを丹念に見て回っているキャメル色のコートが目に入る・・・真紀だった。こんな遅くに。にわかには信じられなかった。今宵サンタクロースは大人にもプレゼントをくれるのか？

「今、帰り？」

俺が近づくと真紀は少し赤い顔をほころばせた。

「うん、フリーの子だけの淋しいクリスマスパーティーだったんだ。周平君は今仕事終わり？大変だねえ。お疲れさまー」

少し酔っているらしく甘えたような口調が可愛かった。真紀は「なんか私ばっかり楽しんじゃって悪い」と言いながらもパーティーの様子を話してくれる。

「プレゼント交換なんて小学生以来だったよ。１５００円以内って決めてプレゼント持ち寄って、輪になって『ジングルベール、ジングルベール』って歌の間に回すの」
真紀はくすくす笑って、今度はくるりと後ろを振り返った。
「このツリー見た？面白いね、風船の中にいろいろ仕込んであるの。花束とか、子供のおもちゃとか。サンタさんのプレゼントツリーだって」
ここでしばらくツリーを見ていたらしく、鼻の頭が真っ赤になっている。酔っ払いめ、絡まれたらどうするんだ。
「寒いけど、雪は降らなかったねえ」
俺の気も知らずに、真紀は暢気に空を見上げた。吐く息が白く立ち上る。今、俺の望みをもうひとつ叶えてもらえるとしたら。バーナードカフェは今ならまだ開いている。
「・・・今日、寄ってかない？」
大きく頷きながらぴかぴかの笑顔が返ってきた。

俺たちはバーナードカフェで一つだけ売れ残っていた小さなケーキを半分ずつ分けて食べ、ささやかなクリスマスを祝った。馬鹿みたいに幸せで、俺にしてはいつになく饒舌になったけれど、酔っていた真紀は全く気にしていないようだった。いつまでもこうしていたかったが、閉店の時間が近づいて仕方なく重い腰を上げる。帰りがけレジ脇のオリジナルグッズ・コーナーに目をやると、クリスマスツリーの根元にセントバーナードが寝ている絵のクッキーが売られていて、俺は思わず手を伸ばした。
「何か買ったの？」
そう言ってのぞき込む真紀に、
「やっすいプレゼントで悪いけど」
とセロファンとリボンに包まれたクッキーを手渡した。
「ええっ、私に？」
彼女は無邪気な瞳をきらきらと輝かせた。

ああそうか、きっと皆こういう顔を見たくてプレゼントをするんだ。
クッキーの包みを目の高さまで上げて色んな角度から眺めている。
「・・・可愛い！ありがとう！でも私、何もあげるものないよ」
慌てる真紀を両手で制した。
「いや、付き合ってくれただけで十分。半分こだけど今日中にケーキにありつけるとは思わなかった。今帰ってもどうせ家族は起きちゃいないし、もう寝るだけだと思ってたから」
「・・・そうかな？」
真紀ははにかんで微笑んだ。
「うん、いいイブだったよ」
嘘じゃない。どんなに嬉しかったか、言っても信じてくれないかもしれないけど。
俺は、２５日の朝枕元にお目当ての物を見つけた子供のように、満足して帰路についた。

飛べない鳥

年内も何とか乗り切り、正月休みに入った。真紀は実家に帰っているだろう。特に予定もなく街をぶらぶらしていると、革製品を扱う雑貨屋が目に入った。キーケースが壊れかかっていたので、代わりが見つかればと立ち寄ってみる。

少し値は張るが、バッグや手帳カバーなどユニセックスでシンプルなデザインの物が多い。中でも羽モチーフのキーケースが気に入って、買おうとレジに並ぶと、近くにアクセサリーのコーナーがあった。すでに金具がついたネックレス用の革紐が並び、そこに通すペンダントヘッドを自由に選べるようになっている。雪の結晶を象ったきらめくペンダントヘッドを手に取った。

「それお買い得ですよ」

女性店員が話しかけてくる。冬のデザインだからそろそろ季節外れになる前に売ってしまいたいのだろう。ひんやりと重いそれはガラスビーズがちりばめられており、黒い革紐につけるとなかなかシックだった。

「この紐は短めのチョーカータイプで、金具はマグネット式ですから、すごく付けやすいです」

以前真紀がネックレスの金具がとれなくて四苦八苦していたのを思い出してつい笑みが出た。手に取ってみると貝合わせのようになっていて、確かにぱちんぱちんとすぐ取り外しができる。なによりこのモチーフは真紀に似合いそうだ。店員に買うことを伝えた。

「プレゼントですよね？お箱とリボン、どうします？」

「あんまり仰々しくしないで下さい」

アクセサリーとしてはさほど高価な物ではない。きっちり包まれて、期待されたり引かれたりしても困る。

「じゃ、当店のベルベットの袋に入れて、リボンをつけた紙バッグに入れときます」

プレゼントを手に店を出ると、改めて胸が鳴った。真紀の誕生日、展示会が終わるのは昼だ。打ち上げの昼食会があるけど、遅くなっても夕方には帰宅できるだろう。なんとか声をかけてみよう。展示会までは仕事に集中と思っていたのに。両手で頬を叩いて浮き立つ心を戒めた。。

展示会当日がやってきた。久しぶりに前日から徹夜状態で準備に臨む。開催前、取引先向けの会社の業務説明ブースで何度も説明原稿をチェックしてから、一般向けブースの状況も見て回る。真紀は子供に風船を配る係らしく、チャコールグレイのスーツの上にピンクのエプロンをし、風船の糸が絡まないよう悪戦苦闘していた。時々ぱん！という音がして思わず苦笑する。パニクるなよ、真紀。

天候にも恵まれ、展示会は盛況だった。取引先の重役を案内していると、泣いている子供と一緒に泣きそうな顔をしている真紀の姿が目に入る。空に赤い風船が一つ、糸を揺らして風に流されてゆく。

Ｉｆ　Ｉ　ｗｅｒｅ　ａ　ｂｉｒｄ，　Ｉ　ｃｏｕｌｄ　ｆｌｙ　ｔｏ　ｙｏｕ.

昔習った英語のセンテンスがふと蘇った。

きみがそんな顔をしないためなら、空も飛びたい。

俺は頭を振ると目の前の重役に意識を戻した。

何とか大きな問題もなく展示会は幕を閉じた。終了後の社を上げての打ち上げを兼ねた昼食会で、壇上に上げられ挨拶をさせられた時も、達成感とは別の胸の高鳴りを隠しながら、誇らしげに俺の声に耳を傾けている真紀を見ていた。

帰り道、様々な社員に声をかけられながらも駅に急いだ。売店を覗いたり電車の到着時刻を見る振りをしながら真紀を探すと、しばらくして向こうから内巻きカールを揺らしながらやってくるのが見えた。思わず手を振りそうになったが、ぐっとこらえる。あくまで偶然の振りをして合流した。

ふたりで電車に乗り込むと、今までにない緊張が体を包んだ。寝不足も手伝って変に気持ちが高揚している。鞄の底に眠る雪の結晶のチョーカーを意識して、落ち着かない気持ちを奥歯で噛み締めてやり過ごした。

「3時頃に電車に乗るのって、なんかさぼったみたい。変な感じ」

真紀の声が聞こえる。そうかまだ3時なんだ。バーナードカフェもいいけど、落ち着いて話せないかもしれないな。どこがいいだろう。その時ふと俺の頭に同級生の親父がやっている喫茶店が思い浮かんだ。良い趣向かもしれない。久しぶりに俺もあのコーヒーを飲みたいし。さりげなさを装って提案した。

「今日はさ、うちの駅に降りてみない？」

外れた箍（たが）

その店は俺の最寄り駅笠倉町にあるテナントビルの2階にあった。以前はもっとファミリー向けでのほほんとしていたのに、不景気のあおりか若い女性向けの服や雑貨を置いた店ばかりになってしまっている。そのビルは5階の美容室店長の持ち物で、その女性店長と喫茶店のマスターは中学からの同級生。マスターが今でもそのビルに店を構えていられるのは、そんな昔のよしみのお情けだと皆が噂する。今風の店がひしめくビルの中で、その店「ｊｕｎｅ」だけは時代が止まったような懐かしい喫茶店だったから。高校の時でさえレトロだった雰囲気そのままに、近所のおじさんおばさん連中がカウンターにいて。髭のマスターはいつも黒いシャツとジーンズにグレイのエプロン。アイリッシュコーヒーを頼むとまるで手品のように厳かにグラスやウイスキー瓶や砂糖壷を並べ、青い炎を操るのだ。成人になって自分で注文する日をずっと待ちわびていた。大人になった俺は、想像したよりずっとアルコールに弱かったけれど。

マスターに目で会釈して真紀を窓際のテーブル席に座らせた。

「周平君かあ、ひさしぶりだねえ」

マスターは髪にも髭にも白髪が少しずつ増えていた。ここの喫茶は5時クローズで夜のバーの準備をするため、就職してからは数える程しか来られなかった。

「お連れさんとは珍しいね」

俺は高校の頃は男友達と、大学時代からはほぼ一人で通っていた。女の子なんてもちろん真紀が初めてで、ここに連れてきた意味を、マスターにならわかってしまうかもしれない。

「会社の同期の藤沢真紀さん。アイリッシュコーヒーを飲ませたくて」

マスターは探るように口の端を上げて真紀を見た。

「うれしいね、でも恋人じゃないんだ？」
真紀が否定しようと口を開きかけたところで、俺はちょっとした賭けに出た。
「・・・ええ、不本意ながら、まだ。」
さあ、どうする？
一瞬聞こえてなかった様にも見えたが、その後うつむいた耳の端が赤いのを俺は見逃さなかった。彼女が逃げる余地はまだ残しておこう。そっと知らぬ間に追い詰めて、いつか俺の手の内に落としてやる。森の中で幻の蝶を追うように。

そのうちマスターが道具を持って現れた。グラスにブラウンシュガーとアイリッシュウイスキーが投入される。マッチで火を点けるとふわっと青い焔が立った。この炎が、いい。熱い炎なのにどこか堪えているような冷静な青。大人になれ、と諭すように。真紀もじっとその揺らぐ火を見つめていた。
なあ、真紀。いま何を考えてる？俺は君のどこにいる？・・・好きだ、好きだ。ウイスキーは静かに燃える。やがてマスターはコーヒーを注いで鎮火した。二重螺旋を描いて立ち上るウイスキーとコーヒーの香り。冬の雲のように厚く垂れ込める冷たいクリーム。コトリと俺たちの前にグラスが置かれる。口を付ければ、冷たさと熱さ、甘さとほろ苦さが、代わる代わる天使と悪魔の様にそそのかした。真紀も感じ入った様子で、ゆっくりと味わっては深い吐息を漏らす。頬杖をついて窓の外を眺める彼女の横顔は、ちょっとアンニュイで色っぽくて、押さえきれない俺の炎をさらに煽った。
ウイスキーはじんわりと身体を暖める。指先がじんじんして熱いくらい、と言う真紀の手を無意識の内に自分の手にとった。ああ、そうだ。きっと酔っている。彼女の戸惑いが指から伝わる。
「酔った？」
真紀の声は少し上ずっている。
「うん、そうかもな、あれっぽっちで」

展示会と真紀の事で夕べ余り寝ていないせいだろうか。
「酔ったときは、つい油断してボロが出る、だから」
俺が彼女の爪を指先で撫でると、真紀はさらに身を固くした。
「なるべく飲まないようにしてるつもりだったけど。もう何度目になるかな、真紀と飲むの」
名残惜しいがすっと彼女の手を離し、残りのグラスを空にする。グラスを置いた音を合図に、唐突に俺の気持ちの蓋が開いた。めらめらと想いの焔に煽られて、箍が、外れた。
「・・・ほんとは素面の時に言うべきなんだろうな」
俺は口を開いた。
「でも、これでももう随分時間をかけたつもりなんだ。俺は・・・」
その時突然、がたん、と激しい音がした。
自分の事で一杯一杯になっていた俺は一瞬反応が遅れ、気が付いた時には、真紀は店を飛び出していた。

蝶は、森の中へ

何が起こった？一瞬訳が分からなかった。まだ、肝心な事は何も言っていないというのに！俺は自分のコートとマフラー、鞄を引っ掴み、急いでレジに向かう。代金をバンと叩きつけるように置くと、マスターから声がかかった。

「どうした？」

真紀の具合でも悪くなったと思ったのかもしれない。俺はとりあえず「すみません」と一礼して真紀の後を追った。

スタートが遅れたのが痛い。真紀はなかなか見つけだす事が出来なかった。2階にはいないようで、1階に下りてから順に階段を昇って探して行った。女向けの服屋の間を縫って、血相を変えて駆けずり回る俺はかなり滑稽だったろう。5階の美容院やダンススタジオまで覗き込み白い目で見られた。

いない、どこだ？もう帰ったか。肩で息をして元の2階に戻る。恥を忍んでマスターに聞いたがやはり戻ってはいないようだった。

「何があった？」

「さあ、俺にもさっぱり。」

つい白を切ったが、実際は彼女の性格からすれば想像がつかないことではなかった。

「もし戻ってくるようなら俺の携帯に連絡くれますか？」

ナンバーをメモに書いて渡す。その時点で携帯がマナーモードのままだったことに気付いた。階段の踊り場に行って、マナーモードを解除した後メールや着信を確認したが、何もない。うう、とうなって壁に寄りかかった。

やらかしてしまった。慎重にしていたつもりだったのに、最後の

最後で。
蝶はひらひらと森のさらに奥へと、逃げた。
脱力して鞄を足元に落とすと、底の方でかすかに、こそっと音がした。銀色のリボンがついた青い袋、雪の結晶のチョーカー。そうだ、今日は真紀の誕生日だった。ずっとこの日を待っていたんだ・・・。
俺の胸の中で凍結しかかっていた情熱がまた少しずつ息を吹き返した。
あきらめるのは、嫌だ。どうしても今日中に渡したい！
駄目元で携帯のボタンを押し、耳に当てた。

「えっ」

幻聴かと思った。Ａｎｙｏｎｅ　Ａｔ　Ａｌｌが階段に鳴り響く。まさか。俺はきょろきょろしながら耳を澄ました・・・３階だ！携帯をそのままに階段をダッシュした。

真紀、真紀！不器用で懸命な君。君がいたから今の俺がある。他の誰でもだめだ。君を失いたくない、頼む。

３階の階段ホールについた時、音は途絶えた。必死になって辺りを見回す。たしかグレイのスーツだった、コートはキャメル色で。もう一度電話をかけた。また、あの切ない旋律が流れ始める。近い。どこだ？視界の隅におかっぱ頭の後ろ姿を捕らえた。あっ、と思ったが、着ているのは深い紫色のワンピースで真新しい紙袋を下げている。え、でも。俺は恐る恐る近付いた。もう一方の腕に見慣れたトートバッグとキャメルのコート。背中が固く強ばっていた。
見つけた！真紀だ！
肩を持ってぐいっと振り向かせると、真紀はひっ、と息を詰めた。

泣きそうな目が俺を見上げて。卑怯だ、全て許したくなる。

「・・・お前なあ」

愛しさと戸惑いとやり場のない怒りが綯い交ぜになって、荒い口調になった。・・・しかしこの格好は。逃げないようにしっかりと手首を握り直しながら、少し身体を離して全身を見る。身体の線が追える程ぴったりとしたラインのワンピースは、少し裾が広がっていて膝小僧が覗く位の品の良い丈だった。大きく開いた襟ぐりが深い紫色のせいで、真紀の鎖骨の下の白い肌はさらに眩く映える。

自分の置かれた状況も忘れしばらく見惚れた。

「なに着替えてんの」

照れて、思わずきつい口調になる。

「ごめん、なさい」

どきっとした。もしかして、俺への拒絶の意味？

「何に、ごめん？」

思わず詰め寄った。

「えっと、・・・逃げたこと」

そっちか、よかった。それなら少し問い詰めさせてもらう。

「・・・変装してでも逃げたかった？」

「・・・そんな。ただ、店員さんに誘導されて、気がついたら試着して買っちゃってて。変装なんて・・・」

俺が血眼になって探してる間、のんきに試着なんかしてやがったのか。おまけにさっき知らない振りをして、さらに逃げる算段をしていた。

「・・・俺を無視しようとしたね」

「だって、混乱するよ、こんな・・・」

「こんな、何？」

真紀はただ首を振るばかり。わかってるんだ、追い詰めすぎると何もできなくなってしまう君。いつも守ってやるはずの俺が、崖っぷちぎりぎりまで容赦なく追い込んでいる。それでももう攻めこま

ずにはいられなかった。

「・・・ごめん、でも決めてたんだ。イベントが終わったら動く、って。2月前には何とかしなきゃ、と思ってたから」

スパイシーバニララテが店から消える前にどうしても繋いでおきたかった、細くても長い縁(えにし)の糸を。

「何とか、って？」

振り絞る様な小さな真紀の声。しかしそれはかすかな希望の灯をともした。真紀は聞きたがっている、俺の気持ちを。勇気が湧いた。

「・・・おにぎりもらった頃から、実はもう捕まってた。」

真紀はじっと俺を見る。戸惑いはあるが拒絶はない。

「一生懸命だけど融通がきかなくて。いつも目一杯のくせに、人のこと心配して、その気がないのに俺を餌付けする」

話しながらいままでの日々が色鮮やかに蘇り、不覚にも涙が溢れそうになった。

「去年仕事場が離れたときもどうってことないし。必死で同期会開いても何も変わらない。散々美砂たちに責められたよ。真紀が引っ越して初めて浅葱で見かけたときも声がかけられなかった」

「初めてって、あの時じゃなかったの？」

真紀は目を見張った。恥ずかしかった。偶然を装って創り込んだ計画。

「・・・あの日休憩室で、バーナードのマグ使ってる真紀を見て、策を練った。香りで分かるくらいラテが好きなのは嘘じゃない。だけど、」

照れくさくてこつんと額を合わせた。

「これが最後のチャンスかもしれないってしがみついた」

真紀の吐息が聞こえる。今どんな顔してる？俺は額を離して真紀の両肩に手を置き、ふたりの距離を離した。真っ赤になって目を伏せる真紀。緊張に耐えかねて身をよじり俺の視線から逃げようとす

る。駄目だ、逃がさない。ぐっと真紀を引き寄せると、よろけて俺の胸の中に倒れ込んだ。

温かく息づく柔らかな身体。シャンプーだろうか、ほんのりオレンジみたいな甘酸っぱい香りがする。ああ、真紀。深く吸い込んで思い切り抱きしめた。後から後から想いが溢れて湧き上がる。

真紀でなきゃだめだ、真紀しか要らない。他のものなんて悪魔にでもくれてやる。

「・・・俺のものになって。」

息が上がり声がかすれる。

「お願いだ」

懇願しても真紀からの返事はない。俺の胸に頭を預けたままだ。

「真紀」

促すように背中をそっと揺すると、ぶるっと震えてわずかだがこくん、と頷いた。・・・Ｙｅｓ、なんだよな？とてつもない喜びの波がおしよせて胸が熱くなるが、それで許したくはなかった。

「・・・駄目だ」

きちんと言葉にして、実感させて。君が俺のものだという証をくれ。

「言って、ちゃんと」

魚心あれば水心

その時、高い靴音が響いてふたりの身体が同時に跳ねた。そのまま慌てて俺の胸から逃れる真紀に心の中で舌打ちする。現れたのはヒールの高いブーツを履いた茶髪の若い女、透けるビニールのバッグに財布を入れているところを見ると店員だろう。急いでいる風なので道を譲ろうとすると、えっ、と言ったなり真紀が固まった。知り合いか？店員の方も真紀をじっとみたが、紫の服をみて、ああっ、と声を上げる。

「さっきはありがとうございますぅ！」

この服を買わせた張本人か！なるほど真紀が丸め込まれそうな感じだ。物怖じせず果敢に話しかけてくる。

「彼氏さんと待ち合わせですかぁ？」

普通こんな階段で待ち合わせするか？とは思ったが、彼氏という言葉に俺はちょっと気を良くしていた。

「ねっ、このワンピ素敵ですよねっ？」

店員は俺に同意を得ようと目線を合わせて微笑む。確かに、やられた。いつもスーツ姿ばかりで、こんなに色っぽく化けるとは思ってもいなかったから。

「うん、よく似合ってる」

いい仕事してくれたよ。俺は真紀の両肩に手を置いて後ろから軽く押し出した。そしていけしゃあしゃあと、

「綺麗にしてくれて、ありがとうございます」

と言ってやった。とたんに真っ赤になってよろける真紀が笑える。俺がそんなこと言うとは思いもよらなかったんだろう。ざまあみろ。店員もはしゃいで、

「うわあ、ゴチソウサマですー。こういうことがあると、この仕事やっててよかったあって思うんですよー」

と言い残して去っていった。いい奴だな、店員。

後ろ姿を見送りながらも、すかさず脱力した真紀の手を取った。
「離して」
頬を染めて真紀は言ったが、前科がある。離してやる訳がない。
さらに固く指一本一本を絡めるように握り直した。

その後、2階に降りてマスターに詫びを入れにいった。ちょうど喫茶が終わる時刻で、客は誰もおらず、バーの準備が始まっていた。
「おお、見つけたか」
マスターは森の賢者のように言って目を細めたが、俺たちの繋がれた手を見てにやっとして突然俗物化した。
「うまくいったってことかな？」
「・・・お陰様で」
さすがの俺もマスターには頭が上がらない。
「いやー、カウンターの客の噂になってたんだよ～。恋人じゃないっていう割には、いい雰囲気で手なんか握っちゃってさ。こりゃひょっとすると、と思ったら突然の逃走劇」
楽しげに笑うマスターに、真紀は真っ赤になって「すみません、すみません」と何度も頭を下げた。
「奴ら暇だからねえ、修羅場か？ってもう賭けでも始めそうな勢いで。やっとさっき帰ったんだよ」
恐るべし常連客。ここに彼らが居ないのに心からほっとした。
「・・・とにかくご心配おかけしました。ありがとうございます。またほとぼりが冷めた頃にこいつ連れてくるから」
そう言って真紀を見ると、うつむいて真っ赤になっている。
「おーおー、こいつだって。いっちょ前に。嫌われんなよ？」
自慢の口ひげがくいっと上がった。

真紀と手を絡めて歩くと、夕暮れ時の馴染みの街もまるで違った世界みたいだ。足が地に着かないという感覚を大人になってから初めて味わった。歓びが次から次へと泡立って、身体の中がシャンパ

ンになったみたいだ。俺はその後もずっと一緒にいたかったが、真紀に拒否された。
「無理。もう、帰して。ダメなの、心臓が」
片言みたいに言って胸を押さえる。そういえば今日は展示会で真紀も疲れているはずだし、俺も昨日からほとんど寝ていなかった。その上誰かさんのお陰で散々駆けずり回ってくたくたで、確かに二人で食事をしても眠ってしまうかもしれない。
仕方なく明日逢うことを約束させ、手を繋いだまま笠倉駅に向かった。

幸せは、増幅する

離れ難くて一緒に改札を潜った。ホームでも手を離さずにいたら、真紀が小さなくしゃみをする。しまった、コートを着せてなかった。しかもいつもより露出の多い服で。

「ああ、ごめん」

そんなことを言えずにいた真紀も相当緊張していたんだろうけど。俺が手を離すと真紀は荷物を足元に下ろしてコートを羽織る。ワンピースが隠れるのは少し淋しかった。

真紀がボタンを嵌めようとしたところで、俺は大事なことを思い出した。ボタンに触れた手に待ったをかけて、鞄から銀色のリボンがついた例の青い袋を出した。

「今日誕生日だろ」

そう言うと、真紀ははっとして目を見張った。

「・・・知ってたの」

今日の展示会まで、連日俺が遅くまで働いていたのを知っているのは他ならぬ真紀だ。勿論自分から催促するようなこともなく、誕生日を覚えていたなんて思いもよらなかったんだろう。それだけでもこれを用意した甲斐があった。

「知ってるさ」

わざと何でもないように言う。俺がどれだけ今日の日を心待ちにしていたかなんて、一生知らなくていい。開けて、と促すと、彼女の指が袋を止めてある銀色のシールを剥がした。中にある黒いベルベットの袋のリボンを解くと、するりと真紀の手に雪の結晶が滑り落ちた。

「・・・綺麗」

真紀はガラスビーズのペンダントヘッドを、まるで子ウサギでも持つように両手をふんわりと開けたままじっと眺めている。つけた姿が見たい。そう思って真紀の手からそれを奪い、後ろに回り込ん

だ。両端の留め具を持つと、前から内巻きの毛先を経てうなじへ指を回す。止める時指がふれてびくっとした真紀を向き直らせた。紫色の四角い襟元に囲まれて、しっとりとした白い肌に輝く雪の結晶。真紀のすらりとした首に、黒い革紐が甘過ぎず映える。おずおずと俺を見上げる真紀の目は潤み、冬空の星のように瞬いていた。

「今の服にぴったりだ」

俺が微笑むと、

「ありがとう・・・嬉しい」

とため息のように小さく喜びを声にした。真紀は突然きょろきょろして後ろを向くと、隣のホームに来ている電車の前に立つ。窓ガラスを鏡にして自分の胸元を映した。誓いの儀式のように胸に手を当てて、雪の結晶をうっとりと眺めている。よく見ると瞳の際にきれいな涙の珠がふっくらと浮き上がっていた。

こんなに幸せそうな真紀を見たことがない。自分がそうさせているのだ、と思ったら、もうたまらなくなった。

唐突に想いが溢れて、水かさの増した濁流のように俺を飲み込む。俺は手早く自分のマフラーを外し、それをばさっと真紀の頭に被せた。マフラーごと真紀の頭を引っ張って紫とターコイズの縞々に隠し、俺もその中に入る。そうして出来あがった、小さなモンゴル・パオのような二人だけの温かな世界。自分たちの吐息が満ちて、吸い込まれるように口付けていた。真紀の唇は熱くほんのりコーヒーとウイスキーの匂いがした。中に入れて欲しくて舌でノックすると無防備に薄く扉が開く。後は無我夢中だった。

真紀がぶるっと震えてようやく我に返る。唇を離したと同時に真紀の乗る電車がやってきて、ボタンを留めていなかった真紀のコートが翻った。

「ほら、乗れよ」

わざと平気そうに言ってやる。人前でこんな大それた真似ができるなんて、自分でも思わなかったから。

「信じられない！」

これ以上ないくらい真っ赤になって真紀が叫んだ。俺のマフラーでターバンのように顔を隠しているが、かえって目立っていることに気付いてないのが笑える。
「後悔した？・・・でももう逃がさない、絶対に」
捨て台詞を言い終わるタイミングでドアが閉じる。呆然とした表情の真紀を乗せ電車は走り出した。
・・・また、明日な。今日だけはゆっくり休ませてやる。
俺は見えなくなるまで電車を見送ると、足取りも軽く家路を急いだ。

「おかえり、どうだった？」
玄関を開けると、お袋が台所から顔を出した。
「えっ」
うっかり真紀のことだと思い、何故ばれた、と思ってしまう俺は相当な馬鹿だ。展示会のことじゃないか。
「まあ、何とか。無事終わったよ」
「そう、それは良かった・・・」
そう言いながら俺の顔を見るなり、お袋が真っ赤になって固まった。
「・・・何？」
俺は首をかしげた。
「・・・鏡！見てきたら！」
ん？そのまま洗面所に入って鏡の前に立つ。唇の端にピンクベージュの口紅が付いていた。
「イベントが終わって浮かれてんのはわかるけど！」
台所からお袋の声が響く。
「過剰な接待でも受けてきたんじゃないでしょうね！」
「アホか！」
何想像してんだ。おばはんの発想は恐ろしい。俺はずかずかと台所に入り、

「過剰な接待要員がこんな控えめな色の口紅つけてるか！真紀だよっ！」
と思わず叫んでしまった。一瞬お袋は目を見開いたが、次の瞬間唐突に
「きゃ～！」
と叫んで俺の傍に駆けてきた。
「何、何！いつからなのよおっ！」
「・・・うるせえな」
俺としたことが。迂闊だった。
「だって、だって！真紀ちゃんてＡｎｙｏｎｅ　Ａｔ　Ａｌｌの君でしょう？！ねっ、ねっ！私がいったとおりじゃなあい！」
お袋は俺の腕をばしばしと叩いた。
「よかったわね！すてき！ああ、なんか嬉しくなってきた！」
お袋の興奮は止まらない。
「今日、エビフライも付けちゃう！」
うちのお祝い事は小さい頃から決まっていつもエビフライだ。
「・・・俺、夕飯まで寝てくるけど」
「どうぞどうぞ！エビ解凍するからもう少し時間かかるし！ああ、私まで幸せになっちゃうわあ！」

俺は自分の部屋に戻り、部屋着に着替えてベッドに横たわると、両腕で自分の身体を抱きしめた。オレンジのような真紀の香りと柔らかな感触が蘇る。

そうだよ、幸せは増幅するんだ。お袋も、あの真紀に服を売った店員も、風船をもらった子どもも、良介や美砂やマスターも・・・みんな一緒に膨れあがってメリーゴーラウンドのように回るんだ・・・。

重たくて甘い睡魔がじわじわと体を蝕む。俺はそのまま微笑みな

がらゆっくりと目を閉じた。

Ｆｉｎ

幸せは、増幅する（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございました。この後後日談が入ります。どうぞまたお立ち寄り下さいませ。読んだ後、皆様が少しだけでも幸せになりますように。

後日談～愛は連鎖する（１）（前書き）

「偶然は、創られた奇跡」１２話の後日談、日曜日の午後の話です。「ずっと、冬のままで」１２話「ラテの冷めない距離（２）」（日曜日の午前中の話）の続きになります。

一話ずつ、視点が変わりますのでご注意下さい。

１３話は周平サイドです。

後日談～愛は連鎖する（1）

～周平サイド

「どうしてひとりで行かないのよぉ」
着替えを取りに行くから一緒にうちに来て、と何とか説得して浅葱駅から笠原町までの電車の中。往生際の悪い奴がぶつぶつ言っている。
昨日、真紀の誕生日と会社のイベントがぶつかった土曜日。色々、そう本当に色々あって。それでも何とか、気持ちを伝えることが出来て、彼女もそれを受け止めてくれたはずだ。3年越しの恋が叶った週末。そのまま一晩一緒に居るっていうのも、そうありえないことじゃないと思う、大人だし。
なのに彼女は、
「無理、もう、帰して」
と泣きべそで許しを請うた。真紀のパニック体質は誰より知っていたが、恋愛に関して発動されるとこんなにも質が悪いことを知った。俺でなければきっと愛想をつかされる。ま、それはそれでいいんだけど。
明けて今日の日曜。一秒でも早く会って、気持ちを確かめ合いたくて。彼女が早く来るのを見越して、待ち合わせのカフェに30分以上前からスタンバった。それから何とか真紀の家にたどり着いたのだが、泊まらせてといったら怒られるし、朝一緒に出勤するから着替えを取りに行きたい、つきましては俺の家に、と説明すればまた怒られる。
「・・・なあ、俺昨日まで随分がんばったよな？」
耳元でささやいた。
「ご褒美、くれよ」

真紀は耳を押さえて頭をふった。

嫌がる真紀を引っ張ってうちに連れて行った。笠原駅から徒歩１５分、ひと昔前の振興住宅地だ。うちを建てた頃はまだ家も少なく、畑や空き地が結構あったらしい。今となってはほとんどが住宅か駐車場で、当時からの家々はそれなりの風雪を経て佇んでいる。

うちの垣根が見えると、俺の匂いを嗅ぎつけて興奮したトムが鳴いているのが聞こえた。真紀はトムには会いたいがお袋には会いたくないらしく、引いた手を逆に引っ張られた。

「なんだよ」

「お母さん、いるんでしょ？」

「居ると思うよ、もしかしたら親父も」

「ええっ？！電話で確認とかしなかったの？」

真紀が思わず後ずさった。

「・・・してる暇なかっただろ？」

俺が顔をのぞき込むと、真紀は顔を真っ赤にして俯いた。そりゃあ、そうだ。今朝バーナードカフェで会ってこの方、片時も真紀と離れず何処かしらをくっつけていたんだから。俺は構わず真紀の手を引いて行くと、トムが垣根から飛び出さんばかりに身体を乗り出しているのが見えた。母の好みでアメリカンな名前が付いてはいても、彼はれっきとした柴犬だ。犬好きの真紀は垣根に近づくと、空いている方の手でトムの背中を撫で、やっと笑った。

「人なつっこい」

「恐がりのくせに警戒心がないんだよ。花火とか全然駄目で、去年の花火大会の日に・・・」

その時、あんまりトムが鳴いたので見に来たのだろう、お袋がドアから顔を出した。まず俺の顔を見て、真紀の顔を見て。さらにあろう事か、真紀の口元をじっと見ている！口紅の色に合点がいったのか、ぱあっと顔を輝かせて、

「おとうさん！おとうさん！」

と言って中に入って行ってしまった・・・親父居るんだ。
「ね、何？何が起こったの？」
恐る恐る聞く真紀に、俺は爆弾を落とした。
「・・・昨日帰った時にさ、付いてたんだよ。ここに、口紅」
俺が唇の脇を指していった。
「俺お袋に、うっかり『真紀のだ』って言っちゃったから」
「！」
真紀はふらふらとよろめいた。どんな顔してあったらいいの！よりによって昨日と同じルージュだし！と呟いて俺をばしばし叩いている。
そのうちお袋が顔を出して、どうぞどうぞ、と意味深な笑顔で応対するもんだから、真紀はさらに萎縮してしまった。

俺のうちはお袋の方針で居間を通らないとどの部屋にも行けないようになっている。従って俺の部屋も居間経由だ。居間のソファの上には親父が座って新聞を読んでいた。真紀はびくびくと入り口から見ている。何だかＲＰＧみたいで笑える。出でよ、勇者！君のターンだ、真紀。
「親父」
親父はかさっと新聞から目を上げた。初めて気付いた風を装っているが、お袋が騒いでいたから知らないはずはない。真面目に見えて案外食わせ物なのだ。
「同じ会社の藤沢真紀さん」
「藤沢です。突然お邪魔してすみません」
真紀がペコリと頭を下げると、親父は「どうも」と挨拶を返しながら真紀の顔を見た。
「藤沢さんね」
口の中でもぐもぐ「藤沢、藤沢」と繰り返すと、突然、にやりとして、
「じゃ周平が婿入りしたら藤沢周平だな」

といった。親父！
「はあ、そう、ですね・・・？」
真紀は笑えない冗談に思わず相槌を打つ。
「ま、一人息子だから婿はちと厳しいぞ。藤沢さんは一人っ子？」
「いえ、姉がひとり」
「そう。山形、行ったことある？」
唐突だな。
「山形、ですか。昔、ですけど、家族旅行でさくらんぼ狩りにいったことがあります。可愛い名前の駅がありますよね、温泉がある街で」
「『さくらんぼ東根』ね」
面接試験みたいに素直に答える真紀に、親父はにこにこしている。どうやら真紀は気に入られたらしい。
「親父は山形県の鶴岡出身でね、地元出身の藤沢周平を敬愛してるわけ。本も山ほど読んだし、俺の名前もその人からとった」
「・・・もう生まれついての時代小説好きなのね」
真紀は俺と親父を見て嬉しそうに微笑んだ。そこへ、お袋が顔を出す。
「真紀ちゃーん、今日お夕飯食べてかない？」
「は、はあ」
まだ3時だぞ、おい！何時間さらし者にされなきゃいけないんだよ。
「駄目。もうすぐ出かけるから」
俺はきっぱりと拒絶する。
「ええっ、あんた何しにきたのよぉ」
「着替え取りに。今日帰らない。明日直で会社行くから」
突っ込まれないようにすばやく畳み掛ける。
「何だ、仕事か？」
頼むよ、親父。
「何でもいいだろ」

早く、部屋いこう。振り返ると、真紀が俯いてもじもじしていた。
「・・・真紀、なんでそこで赤くなるかなあ！」

後日談～愛は連鎖する（2）

～真紀サイド

彼の部屋はやはり本で一杯だった。圧倒的に時代小説が多く、その他に現代小説や詩、短歌・俳句集、翻訳物はトルストイからミステリーまで、ジャーナリズム、コミック、絵本、モダンアートの画集、写真集。

「すごい。文豪の本棚みたい」

「親父のものもあるけど」

「同じ趣味っていいよね」

古い書籍のビロードのような背表紙を撫でた。

「おかげでちょっと物言いが親父くさいって言われる」

わかる！思わず手を叩いた。

「そういえば周平君、私のことおかっぱって言うよね」

「それ、美砂にも言われた。だっておかっぱじゃないか、他になんて言うんだ？」

そう言って私の髪に自分の指を通した。彼の指が地肌を滑っただけで首筋に電気が走ったみたいになる。思わず肩をすくめた。

クローゼットを開けて、シャツやネクタイ、スーツを取出し、鏡に映してコーディネートを確認している。ジャケットのかかったハンガーを顎ではさみ、後ろから抱きしめるようにシャツとネクタイを当てて。いつもそうやって仕度してるんだ。初めて見る男っぽい仕草に見惚れてしまう。

「ん？」

彼がこっちを向いて微笑む。その笑顔が甘くてまた心拍数が上がる。

「これでよし、と」

鞄にノートパソコンを入れ、スーツバッグを机の上に置く。
「後は・・・」
突然ぐいっと引っ張られたと思うとベッドにどさっと倒された。
「少しだけ」
両手を顔の横でぎゅっと握りしめられて、口付けが落ちてくる。彼がいつも寝ているベッドから濃厚な彼の匂いがして、体温や身体の重みと一緒に、五感全てに彼が入ってくる。ああ、溺れるよ、息もつけない。さっき、私の部屋でベッドに倒れ込んだ時、大きな吐息を付いた彼を思い出す。彼も同じ気持ちだったのだろうか。
「やべ」
彼が小さく呟いて、身体を起こした。顔は赤く目は潤み、髪は乱れて・・・震えるほど色っぽい。
「そんな目で見るな」
たしなめるように言うけれど、怒っている訳ではないのは分かる。
「部屋、出られなくなる」
彼は乱れた髪を手櫛で整えるとスーツバッグと鞄を持った。
「ほら」
私を片手で引っ張って立たせ、同じように髪を直してくれる。仕上げに頬にキスひとつ。まだ信じられない。私が好きでたまらないこの人が、私を愛している、なんて。

ひきとめるお母さんをたしなめていた彼は、忘れ物をしたと又部屋に戻る。私は懲りずにブーツを履いてきたので、又脱ぐわけにも行かず、玄関でお母さんと二人きりになった。
「・・・入社した頃ね」
お母さんが口を開いた。
「相当忙しかったでしょう、泊まりもしょっちゅうで。だんだんやつれて寡黙になっちゃうし、一人っ子だし元々は身体も弱かったからついつい心配になってね」
そうだった。何でも半端なことを嫌う彼は、誰より遅くまで残っ

て働いていた。皆消耗していたけど、特に彼は見るからに痩せて、痛々しい位だった。
「そんな時ね、うちで炊き込みご飯を出したらね、『これ、作るの、手間なんだろな』って言うのよ。私がいつも大変だってこぼすから、労ってくれてるのかな、って思ったら」
ふふっ、とお母さんは笑った。
「『こないだ真紀が作ってきてくれたんだよ。朝早いのにさ、あれ炊きたてだったと思う。女ってのは自分が大変でもそういうこと出来んだよな。すごいよな』って」
真紀は胸が熱くなった。「おにぎりもらった頃から、実はもう捕まってた。」あの台詞は本当だったんだ。
「それからよ、真紀、真紀ってあなたの名前がよく話に出るようになって。部署が変わってからはまた仕事の鬼になって心配だったけれど」
お母さんはふっと笑った。
「・・・良かったわ。あの子は昔から執着心が強いの。貴方にふられたら多分廃人同然よ」
優しい表情に胸が詰まる。どうしてそんなに良くしてくれるのだろう。愛する大事な一人息子をこんな見ず知らずの私に取られても良いのだろうか。
「・・・相思相愛って奇跡みたいよね」
臆せずロマンティックなことを言って微笑む。そういえば周平君はよくお母さんのことを「いい年して乙女なんだよ」とこぼしていたっけ。
「何もなくても私もそれで幸せだったから。周平にも幸せになってもらいたいわ。ああいう子だから真紀ちゃんは大変かもしれないけど、よろしくね」
気がつくとお父さんも廊下に立って私たちの話を聞いていた。優しくお母さんを見つめている。いいご夫婦だなあ。その時周平君が戻ってきた。

「お待たせ、って何真紀涙目になってんの」
「あははは」
慌てて顔を反らした。
「変なこと言ってないだろうな」
周平君がお母さんたちを軽く睨む。
「言ってないわよぉ」
ドアを開けると、お母さんの肩を持つように犬のトムがわん！と吠えた。

後日談～愛は連鎖する（3）

～美砂サイド

明けた月曜日。
ずっと我慢していたけど、今日こそは聞き出してやるから。
行動を起こすなら展示会の打ち上げ後だと踏んでいた私と良介は、さりげなく真紀と周平君の動向をチェックしていた。一緒に帰ったのは分かっている。駅で確認したからだ。路線が違うが私と良介も赤松駅を利用している。だからこれは決して尾行、ではない。
良介は週末私の家に泊まることが多い。この土曜日もそのままうちに来ていたが、誕生日にかこつけて真紀にメールや電話をしようとする私をたしなめる。
「余計な茶々入れんな。奴らのことだから下手に動くとうまくいかなくなるぞ。俺、周平に恨まれんのごめんだからな」
私はメールくらいと思ったが、譲歩した。
「じゃ、明日。日曜なら良いでしょ？」
「・・・そうだな。夕方にしろよ。うまくいってもいかなくてもその頃には落ち着いてるだろ」
「ええ～、夕方ぁ？」
不満だったが、日曜まで待って。いよいよ夕方になり、まず真紀の携帯に電話した。
「・・・」
出ない。大丈夫かな？まさかうまくいかなかった？慌てて周平君に電話する。
「・・・あ、」
繋がった、と思ったら、ぶちっと回線が途絶えた。その後何度電話しても繋がらない。真紀にかけても同じだ。

「よせよ、もう。野暮だ」
私の携帯を良介がパチンと閉じる。
「野暮って？」
「明日、聞けば？」
良平は意味深に、にやっと笑った。

そして月曜日。私にしては記録的に早く出勤した。家が遠くなったとは言え、真紀は相変わらず早く出勤しているはず。仕事終わりまで待てなかった。
おかしい。出勤になっているのにデスクに真紀はいなかった。行きそうなところを片っ端からあたり、たどり着いた休憩室。入ろうとした時、別な社員が中を覗いた後慌てて踵を返してゆく。
「？」
中を覗くと、真紀と周平君はそこにいた。あろう事かソファに横並びで、手を繋ぎながら！テーブルには色違いのマイマグ。周平は時折ＰＣをいじりながら食べにくそうにサンドイッチを口に運んでいる。真紀はと言うと手を捕まれたまま、もじもじとサンドイッチを食べていたが、周平君の甘い視線が降りてくると真っ赤になりながらも嬉しそうに微笑みかえしていた。急転直下。誰が見てられないほどじれったいって？
「この～バカップル！」
ひっ、といって真紀が手を離して立ち上がる。周平君は苦々しい顔で、
「お前。昨日何度電話してんだよ」
とぼやいた。こいつ、わざと出なかったんだ、真紀も。・・・ということは。二人をじっと見つめる。真紀は恥ずかしがって俯いているが、その作り立ての陶器のような輝かしい表情は隠せない。周平君はわざと唇を固く結んで眉間に皺を寄せている、嬉しい時の彼の癖。
「・・・良かったね、周平君」

心からの言葉が出た。真紀だって周平を好きだったろうが、この男の足元にも及ぶまい。ずっと見てきた。寡黙で冷静にみえるこの男の、真紀への溢れる愛情を。今度は真紀に声をかけた。
「良かったね・・・真紀」
「・・・何で泣くの、美砂」
気がつくと涙がこぼれていた。
「こいつ随分心配してたんだぜぇ」
遅れて顔を出した良介が、大きいタオルハンカチで涙をぬぐってくれた。
「おめでとさん」
「・・・まあ、いろいろありがとな。特に美砂には、ほんと世話になったよ」
周平の言葉がさらに涙腺を緩ませる。
「あんたたちが幸せになってくれないと、困るのよぉ」
おろおろする真紀と驚いて声も出ない周平に、良介だけが余裕をもって深い微笑みを湛えていた。と、思ったら。
「！」
突然腕をつかまれ身体が傾く。気付けば良介にきつく抱きしめられていた。
「お、おい」
いつも冷静な周平が声を上げた声に、良介はさらに抱きしめる腕を強くした。
「・・・よかったんだよな？美砂」
耳元で自信なさげな小さな声。思わず母親のようにとんとんと背中をたたいた。
「当たり前よ、馬鹿」
身体を離して良介を見つめた。いつになったら自覚すんのよ、私が貴方に首ったけだって。
「だーれがバカップル？」
真紀が怒ったように私の腕を叩いた。

「ほら、始業だぜ」
周平も良介を促した。
「わあ、こんな時間！」
真紀は食べた後を片付けると二人分のマグを持って立ち上がった。
「ほー、真紀が二人分持ってくんだ」
悔しいからもう一言からかってやる。
「バーナードカフェに行く時はいつも一緒って？」
「もう、うるさーい！」

ふと仰いだ窓から梅の古木が見えた。堅く節だった枝のあちこちにいくつもの膨らんだ蕾がついている。
もう、いつ春がきても、いい。

「さあ月曜だ、仕事、仕事」
４人は頭を切り替えて、それぞれの部署へと向かっていった。

Ｆｉｎ

後日談～愛は連鎖する（3）（後書き）

真紀と周平のお話はこれでおしまいです。おつきあいいただきありがとうございました。また番外編などでその後の二人も書きたいと思っています。そして次は、この後日談で予想のついた方もいらっしゃるかもしれません。美砂のお話が始まります。沿線の恋にまだ終点はありません。各駅停車でおつきあい下さいませ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5833p/

偶然は、創られた奇跡

2011年2月5日20時27分発行